OB探訪

焼け野原の東 夢と希望がい

全国出版協会理事長

出版流通大手トーハンの元会長で、全国出版協会理事長
1953(昭和28)年に法学部を卒業。トーハンでは書誌
仕事の進め方、学生時代の逸話などを学生記者2人が聞い

京には
っぱいあった

上瀧博正氏

の上瀧（こうたき）博正氏（86）は中央大学の大先輩だ。
情報をオンライン化して業界を震撼させた。
た。

学生記者／髙瀬杏菜（法４）、内藤伊音（商２）

「学生諸君に対して」。
上瀧氏による直筆メモ

東京大空襲で焼け野原とされた東京、写真は亀戸付近＝
東京大空襲・戦災資料センター提供

――入学は1949（昭和24）年、どんな学生生活でしたか。私たちには想像がつきません

「あなたがたに理解していただくために、時代の違いからお話ししましょう。戦争に負けた昭和20年８月15日を境にして、連合国の占領下に置かれた。いままでの権威や秩序など、世の中がひっくり返った。多感な世代であっただけに、あの記憶はきわめて鮮明です」

「大学進学のため、福岡から上京したのが昭和24年、東京は焼け野原でした。着るものがない、食べるものがない、住むところだってない。国民はみんなそうだから、恥ずかしいなんて思わない。あるのは、がむしゃらに前へ進む気持ち。何もない時代でしたが、オーバーに

言うと、夢と希望がいっぱいあった」

「親は日々の生活で毎日精いっぱいだ。きょうだいは多い。働きながら学びました。昭和25年に朝鮮戦争が始まって、東京駅の荷物扱いとか、夜でも仕事が随分とありましたよ。勉強するために大学に入ったんです。授業は絶対にさぼらない。出ないなんて冗談じゃない。大学進学率は当時５％くらいではなかったでしょうか。詰め襟の学生服に学帽を被って、駿河台校舎へ通ったものです」

授業はさぼらない

「授業のこと、教授の名前、よく覚えていますよ。刑法の牧野英一先生、団藤重光先生、憲法の宮沢俊義先生、商法の鈴木竹雄先生、森清先生、文学は辰野隆先生だ。父親の辰野金吾さんが建築家で、東京駅を設計した。授業を文語調で進める先生がいてね、試験答案を僕は文語体で書いた。『良』をもらったな」

――良？

「優良可という成績、知らないか」

―― いまはＡＢＣＤです

● 朝鮮戦争
1950年６月に勃発、1953年７月に休戦協定に調印。この間、日本は戦争物資の生産・提供による特需景気となり、戦後復興の一因に。

――学生同士では、どんな話をしていましたか

「学生は本をよく読んでいて、日ごろの会話に著者や本の題名が出ていました。僕も一般教養として、岩波文庫のオーソドックスなものは読んでおこうと心掛けていた」

――女子学生はいましたか

「僕のクラスには１人もいない。学年に数人ですよ」

●中大初の女子学生
1946年度から男女共学となり、同年４月に法学部本科（夜間）に３人が入学した。同月末の学内統計では法学部（昼間）に２人の女子学生の在籍が記録されている。

「新聞や出版が好きでね、文芸誌に作品が掲載されたこともある。東京出版販売株式会社に入った。入って分かったのは、出版ではなく流通だった。採用側は労働争議を恐れ、縁故採用がほとんど。入社はまさしく縁ですよ」

「若いこれからの人に云うとしたら、１つは自分の好きなやりたいと思うこと、２つ目は難しいけど50年先まで考えて決めることでしょうかね」

会社には教科書も正解もない

――入社後は

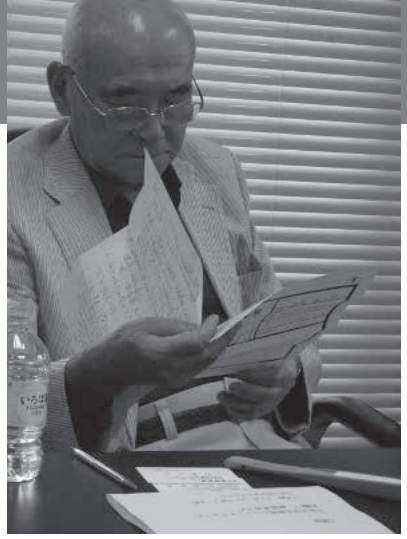
「入って２～３カ月は現場にいて、その後、企画室へ配属された。業務改善や新規事業を企画する。上司から、テーマそのものを自分で考え、答えも出せ、と言われて苦吟の毎日でした。つらくてね、苦しかった」

「学校には教科書があり、正解もあるが、会社には何か新しいことを始めようとしてもその教科書も正解もない。僕は例外的な部署を経てきた。当時は仕事を言われた通りにこなすのが模範社員。提言や異見をいうと悪い社員と言われたものです」

――社会に出てから、大学の授業が役立ったことはありますか

■大学在籍時代の主な世相

1949年４月・ＧＨＱ（連合国軍総司令部）が１ドル360円の単一為替レートを設定。
▽11月・湯川秀樹博士、中間子論でノーベル物理学受賞。
1950年１月・千円札発行。▽８月・マッカーサー司令官が警察予備隊創設を指令する。
▽　９月・大都市の小学校でパン給食が始まる。



「実際にどう役に立ったかは分からない。自覚はしていないが、考え方が論理的であるとか、物事を進めるには段取りや手続きを踏むとかね。大事なことはリーガルマインドだと言われたな」

「情報システム部のころ、いずれはコンピューターの時代がくると思い、独学で勉強した。本は社にいくらでもある。しかし参考になる、分かりやすい本はなかった。ツテを頼って専門家に会い、力をお借りした。本のタイトル、著者、読み方、出版社などの書誌情報をデータベース化し、全国の取引先とネットでつないだ。本社移転建築の際も日本一、世界一の建物を造ろうと講習会を聴きに行き、専門家を訪ねて協力を得た」

人まねは面白くない

――チャレンジャーですね

「仕事は自らの意志で進める。人ができないことをやる。そこにやり甲斐(かい)がある。人まねは面白くない。計画通りにいくことは、まず、ないんだ。考えもしなかったことに直面する。仕事はそこから始まる。強烈な忍耐力がいる。人の力を借りなきゃならん時もある。許されないのは前例主義、責任逃れ。失敗したら社を辞める覚悟でした」

「大事なのは人との関わりです。社長にしたって銀行や取引先と協力する。サラリーマンは自分を理解してくれる人、評価してくれる人が必要です。部下や家族の協力も得なきゃならんだろう。人との縁を大切に、それを忘れないこと。人のために、社会のために。それが自分のためにもなる」

――ありがとうございました。勉強になりました。

● 一番前に座る

「知力を強くするためには活字の力、読書の力と言いたい」という上瀧氏。２年ほど前、吉川英治著の長編「三国志」の文庫版、徳間書店版全五巻も読破した。

「四書五経」にもチャレンジしていて、「半分くらい進行中」。

四書五経は中国・清代末期まで高級官吏の採用試験に用いられた。四書は大学・中庸・論語・孟子。五経は易経・詩経・書経・春秋・礼記(らいき)。こちらも大作だ。

講演会を週２回ほど聴きに行き、「耳が遠くなったこともあるが、一番前に座る」と意気軒昂である。

●トーハンの沿革

1955年１月、業界に先駆けコンピューター化を図り、日本ＩＢＭ社のＰＣＳ（パンチカードシステム）を導入。▽1968年７月、本社を東京都新宿区に新築して移転。▽1984年６月、本社と書店間をオンライン化し、出版情報の高度な流通・活用を目指す東販ＴＯＮＥＴ（東販総合オンライン・ネットワーク・システム）稼働。（同社ＨＰより）

1951年４月・トルーマン 米大統領、マッカーサー司令官を解任。▽ ７月・戦後初の民間航空、日本航空設立。
▽ ９月・日米安全保障条約調印。
1952年７月・破壊活動防止法・公安調査庁設置法公布。
▽11月・米国が水爆実験。
1953年２月・吉田首相、衆院予算委で「バカヤロー」発言。同月・ＮＨＫが東京でテレビの本放送開始。

大先輩の「エネルギー」と「思い」引き継ぎます

学生記者　内藤伊音（商学部２年）

上瀧氏の「強大な活力」に圧倒された。平成に生きる私たちには手にすることができない力強さだ。源泉は戦争体験にあるのではないかと思われる。

敗戦がもたらしたのは、日本のすべてが「ひっくり返った」、かつて経験したことのない衝撃的事実。「お国のため」に生きてきた人々は「自分のため」に生きることを許された。

連合国による占領下、これまでの秩序や権威は破壊され、新しいものに書き換えられた。

私たちにとって「当たり前な社会」が、「当たり前ではなかった」時代を想像するのは難しい。常識とは何だろう―と考えずにはいられなかった。

圧倒的活力をまず感じたのは、大学授業への熱い思い。絶対にさぼらず、優秀な学生だけが支給される奨学金試験に合格した。いまでも授業内容をよく覚えていて、教授の名前がフルネームで出てくる。それもスラスラと。つい先ほど受講したような、みずみずしい気持ちが伝わってきた。

現役学生の私だって、と言いたいところだが、授業内容や教授名を後年すぐに言えるかどうか怪しいものだ。大先輩がいかに、「大学で学ぶ」ことを大切にし、感謝していたかが、うかがえた。

当時の大学進学率は5％ほど。現在は50％を超える。いまに生きる学生がどれだけ学生生活に有り難みを感じているだろうか。

入社後、専門外の仕事を命じられたとき、またしても強大な活力を見せる。

入社間もないころから「自分で考える」ことが身についている人だ。専門家、研究者、教授らに会いに行く。自ら足を運び、目指すところを話し訴え、助言や協力を求めた。アポイントメントを取るだけでも大変だったろう。

いまの時代、遠距離の人とも電話やメール、ＳＮＳ

上瀧氏（後方）を取材する学生記者

ですぐに連絡が取れる。私もこれらに頼りがちだ。

直接会い、全身全霊を捧げて話すことで、先方の心に届く。その結果、人が動いてくれる。現行の通信手段とは比べものにならないほどの効力があるのだ、と大先輩は教えてくれた。

「そこで得た『縁』がね、さらに自分を高みに連れて行ってくれるんだ」とも。道を開くのは自らの力ということなのだろう。

その後、社長、会長と要職を歴任する。私は聞きたいことがあった。〈ご自分が見つけた『仕事のやり方』は社員の方にも実践してもらいたい、と思うのではないでしょうか。どのような指導をされましたか〉

「いい質問ですね」と、ここまでは笑顔だった。「サラリーマン社長ではなく、オーナー社長であれ。会社の株を買いました。自らの生活と財産は会社のために差し出しましたね」

会社とは常に一心同体でいるようにしたという。「財布は一つだ。会社と自分の財布を分けてはいかん」

社員の事業提案『これをやってみたい』を大いに歓迎した。審査では細部まで質問し、返答に納得できなければ差し戻した。

一方で、ハードルを次々に越え、『やります』という強い実証とあふれる責任感がある社員には、惜しみない支援を続けた。

最後に「日本のこれからに」ついても言及された。少子高齢化という難題を抱える日本。世界を率いるような国であるためには経済力だけに頼るのでは駄目だという。

外国人が住みたい日本にしよう

「外国人が日本に住みたい、と思うような日本をつくらなくてはならない」

人、文化、環境といった数字ではくくれない分野で世界に差をつけ、リードしていく。そのためには日本人自身が母国にもっと自信を持って、日本の主張を堂々と発言する。それを実現するのは、若い力と女性の力である、と。言葉に力を込めていた。

私もその一員である。大先輩が掲げる日本にしていくために、私にできることは何だろうか。何をすべきか。

分かっていることは日本がこのままではいけない、ということだけである。未来なんて私には見当もつかない。

でも、だからこそ、いま「考えて、考えて、考え抜く」。今回の取材を通し、触発されたことを実践したい。

大先輩の「エネルギー」と「思い」を引き継いで、若者として、女性として、できることを見つけていこうと思う。

教えられた「人との出会い」「人の大切さ」

学生記者　髙瀬杏菜（法学部４年）

かっちりとした居住まいで、今後の出版業界について語るのではないだろうか。

取材当日、夏の朝。私はそんなことを考えていた。業界や社会をリードする大先輩へのインタビューがもうすぐ始まる。緊張は最高潮に達していた。

中大市ヶ谷キャンパスの一室。上瀧さんは青いシャツ、夏らしい白いパンツ、緑と赤のラインが入った素敵な帽子を被って現れた。なんておしゃれな方なのだろう。

大学時代を語るうえでも、さりげない気遣いを感じた。平成生まれの私たちにも分かる平易な言葉で説明してくださる。

母の言葉を思い出した。「本当に賢い人は難しい言葉を使わなくてもお話ができるのよ」。きょうが実体験の日となった。

中央大学に入学したのが昭和24年。旧制が新制に変わるころという。専門学校へ進学する予定でいた。

運命の人に、このとき再会した。外地から同じように日本に引き揚げてきた同郷の先輩だ。「きみ、大学に行ったほうがいいよ、きみも東京に出てこい」

私たちはインタビューの最中、人との出会い、人を大切にすることを随所で考えさせられた。勤務先トーハンの本社移転を任されたときのエピソードには心を動かされた。

最先端の物流システムを作る。コンピューター導入など、当時は一般的ではなかったカタカナ用語が並ぶなか、大先輩はこう言い放った。

「機械だから、1＋1＝2にしかなりません。計画以上のものができたのは、そこに『人』という存在があったからです」

ここで感じたことは現代社会で垣間見られる、ある種の寂しさだ。最大効率を求め、無駄をそぎ取り、グイグイと突き進んでいく現代社会。

私が小さいころは、お友達の誕生日に“おめでとう”の手紙を渡したものだ。私の誕生日にも同じような手紙をもらった。

交流はいま、携帯電話やスマホによる送受信が大半となった。お祝いメールやねぎらいメールはそれなりにうれしいが、手紙のころに感じた、こみ上げるうれしさ、読み返したときの懐かしさが、味わえなくなってきている。

上瀧さんはこうも話した。「講演会で聴く内容と活字で読む内容は同じかもしれんが、どこかが違う」技術がどんどん進歩して、生活様式がびっくりするくらい変わっても、「人」はこの上なく大切なものだという言葉を継いだ。

私たちはネット時代に生きるが、大先輩のメッセージを心に刻んで生きていこう。

左から 髙瀬記者、上瀧氏、内藤記者